



城

特許審査第三部プラスチック工学 深草 祐一

 あいづわかまつじょう
 第十六回 会津若松城

～戦国末期の風雲～

今回は会津若松城を取り上げます。しかし、白虎隊の悲劇など、幕末の会津戦争はあまりに有名。ここは戦国末期のエピソードを会津若松城の視点からまとめてご紹介したいと思います。

伊達政宗の侵攻と豊臣秀吉の奥州仕置き

戦国時代に会津の地を支配していたのは蘆名氏であり、その頃ここにあった城は黒川城といいました。戦国末期、幾多の窮地を乗り越えた伊達政宗が急激に力を伸ばし、ついに宿敵蘆名を討つべく、黒川城へ侵攻します。伊達の巧みな陽動のため佐竹氏の援軍から離れて単独での迎撃戦に打って出ざるを得なくなった蘆名方は、磐梯山の裾野、摺上原で伊達軍を迎え撃ちました。当初は蘆名軍が猛然と伊達軍を突き崩しますが、砂ほこり混じりの強風が追い風から向かい風になると、士気に劣る蘆名軍は押し戻され、総崩れとなりました（一説には、戦見物に来ていた農民の群れへ伊達軍が鉄砲を撃ちかけて追い散らしたところ、これを味方の敗走と見間違えた蘆名の兵は一気に動揺したという。）。そして黒川城は開城。ここに蘆名氏は滅亡したのでした。

しかしこの時、九州を制圧して東海・北陸以西を傘下に収めた豊臣秀吉が関白名で全国の大名へ向け「天下総無事令」（私戦の禁止）を通達していました。当時勢いに乗っていた伊達政宗はこれを無視して蘆名氏を滅ぼしたのです。その後、秀吉による小田原北条氏の征伐軍に、政宗は迷いに迷った末、大幅に遅れて参陣し、あわや打ち首となることを辛うじて許されます。そして戦後の奥州仕置において、伊達の会津領有は認められず、会

津には信長時代からの有力者蒲生氏郷が入ることになりました。黒川が若松と改められたのは氏郷の頃のことです。しかし、当地に縁もゆかりもない大名が支配体制を整えるのは容易なことではありません。旧勢力の遺臣が不穏な動きを見せ、ついに大きな一揆が起きてしまいます。はじめから伊達の動きを警戒していた氏郷は、政宗が裏で糸を引いていたことを突き止め、証拠の煽動文書を秀吉に送りました。政宗は秀吉に呼び出されて詰問されることとなり、危険な伊達氏は家禄没収の憂き目を見るはずでした。ところが、ここでも政宗はうまく難を逃れます。政宗が文書の最後に書く鶴鴿型の花押（サイン）には必ず鶴鴿の目に当たる部分に針で穴を空けてあるがこの文書にはその穴がないと言って、文書は偽物だと言い張ったのです。果たして秀吉のもとに保管されていたその他の文書を確認すると、確かに穴が空いています。結局政宗は許され、氏郷は異常な心労を重ねただけで、伊達をとり潰すことができずに終わったのでした。

関ヶ原の戦いにおける上杉の戦略

先の心労がたたったのか蒲生氏郷は間もなく没し、関東の徳川、奥州の伊達を抑える重要な位置にある会津には、信頼に足る大名として、越後から上杉景勝が120万石の大封をもって入城しました。間もなく秀吉が死亡し、石田三成ら文治派と福島正則らの武断派との対立を利用して徳川家康が影響力を拡大していきます。家康と同じく豊臣政権の五大老の一人であった上杉景勝は、家康の自分は秀吉の遺命に背いて他家と婚姻を結ぶなどの勝手をしながら人に難癖を付けて追い落とすようなやり方に



革籠原を想定決戦場とした布陣

反発。会津に帰って領内の整備に着手します。この時、会津若松城の北西の地に、さらに巨大な「神指城」の築城を開始しています（後に工事中止）。そこに家康から何故武備を固めるのかとの詰問状が届きますが、これに対して堂々と反論したのが、世に名高い「直江状」です。家康は、このような無礼な書状は受取ったことがないと怒りに打ち震えたといえます。上杉の執政直江兼続は盟友の石田三成と密かに謀り、家康を挑発して会津へ討伐軍を発せしめ、その間隙を突いて三成が秀吉恩顧の西国大名を結集して上方で挙兵、西と東から家康を挟み込み、最終的に江戸に追い詰めるという壮大な計略を立てていたと言われています。上杉は、これも三成の盟友である常陸の佐竹と連携し、白河南方の革籠原という湿地帯を想定決戦場として必勝の態勢で待ち受けていました。しかし、三成の挙兵がわずかに早く、その知らせを受けた家康は小山で進軍を止め、江戸へ引き返してしまいました。この時、兼続は景勝に向かって追撃を進言しますが、逃げる相手を追い撃ちするようなことは謙信公以来の軍法に無いとして退けられたといえます。結局、上杉軍は北方で敵対する最上氏の諸城攻略に向かうことになりました。上方での戦いが長期化するとの読みもあってのことと思われそうですが、戦いは関ヶ原であっけなく決着。上杉軍は最上、そして様子を見て本格参戦した伊達の大軍に追撃を受けながら退却する羽目になってしまいました。この時、兼続は殿を務めました。あわや討ち死にを覚悟した時、加賀前田家を出奔して参陣していた親友の前田慶次郎（利益：稀代の傾奇者として有名）

が上杉の剛の者とわずか数名で敵中に切り込み敵を押し返したという話が伝えられています。関ヶ原後の処分によって、上杉氏は家禄没収を言い渡されます。しかし、兼続は自らの知行を主家に渡すということで家康を説得し、上杉家を存続させることに成功しました。ただし、120万石から30万石への大減封です。通常は家臣の大半を解雇するところですが、上杉家はそれをせず、希望する家臣全てを連れて米沢へ移って行きました。その分、台所事情は厳しくなり、米沢藩は貧窮にあえぐことになります。後に名君上杉鷹山が出て藩政改革を行ったのは、こうした背景から必要に迫られたものだったのです。

その後の会津若松城

その後、会津には加藤嘉明が入りました。嘉明は伊予松山城を築城した人物で、築城名人として知られています。現在の会津若松城（鶴ヶ城）は加藤嘉明、明成親子の時代に大改修されたもので、戦国末期の最新技術を投入した縄張りは幕末の会津戦争で真価を発揮し、降伏まで最新装備の官軍を寄せ付けませんでした。しかし、秀吉恩顧の大名である加藤氏の支配は二代で終わり、結局会津には三代将軍徳川家光の異母弟、保科正之が入って幕末まで続きます。そして第九代容保の時、激動の幕末を迎えることになるのでした。会津戦争で官軍の砲撃を受け、美しかった鶴ヶ城の天守は無残な姿となり、後に取り壊されてしまいます。しかし、昭和40年、鉄筋コンクリート造りながら往時の姿そのままに外観復元され、現在に至っています。最上階の赤い欄干をアクセントとした純白の塔層型天守は独特の美しさがあり、非常に見応えがあります。中の展示物も充実していますので、是非訪れてみて下さい。



鶴ヶ城の復元天守